

二九 西金砂神社小祭礼

〔名 称〕

西金砂神社小祭礼。単に小祭礼、小田楽ともいう。七十二年に一度行われ、日立市水木浜まで磯出する大祭礼（大田楽）に対する名称である。

〔実施場所〕

常陸太田市（旧久慈郡金砂郷町）上宮河内町に鎮座する西金砂神社から、同市天下野町、中染町、和田町などを経て馬場町の仮殿まで渡御し、西金砂神社まで還御する。渡御中、中染、和田、馬場で祭典と田楽舞を奉奏し、還御した神社でも二度の祭典と田楽舞を奉奏する。

馬場町で祭典と田楽を行うことについての由来は、現在も金砂権現を祀っている地周辺が田楽師古川氏の馬場町に拝領した土地であり、その地で田楽を行っていたが、手狭なので現在の馬場八幡宮の境内を借りて行うようになったと伝えている。また、祭典と田楽を行い、七台の屋台が出て最も賑わう和田の祭場は、かつては祈祷と御神酒頂戴を行うお休み場で、そう古くない時代に和田を含む沿道七か村の要望によって田楽を行うようになったのだという。

〔実施時期〕

六年に一度、丑年と未年の三月下旬に三泊四日で実施される。

〔伝承組織〕

祭礼実行の中心は、常陸太田市上宮河内（通称上宮）、同下宮河内（通称下宮）、同赤土、常陸大宮市諸沢の四大字の氏子であるが、祭神が出現したと伝える水木浜を擁する日立市水木町を含め、馬場町までの渡御の沿道十六地区が祭礼に関わりを持つ。特に田楽場であり渡御行列が三泊する中染、火消行列を出す町

田および田楽場となる和田と馬場は、早くから組織を作って準備を進めるなど祭礼を支えている。なお、水木町においては、有志で組織する水木講中が祭礼に関わっている。

〔由来伝承〕

金砂山は大宝二年（七〇二）役小角によって創建され、慈覚大師円仁が中興したと『金砂両山大権現大縁起』は伝えている。近江国日吉大社の分社で、神仏混淆時代には金砂山王権現と呼ばれ、天台宗の山岳寺院であった（後世真言宗に変わる）。現在も、中染の横川、天下野の坂本など、地名にもその名残を留めている。

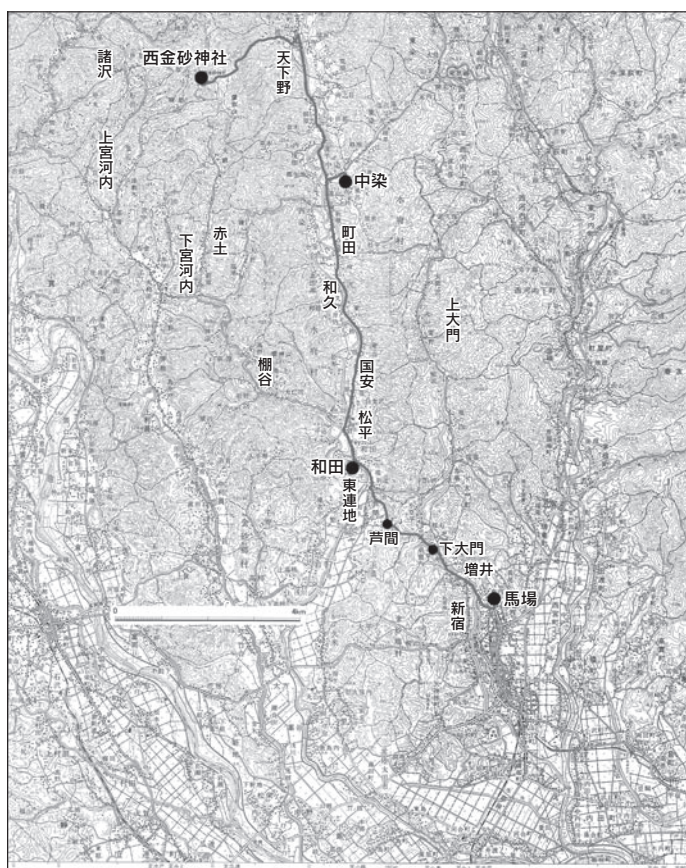


図1 西四か村・東三か村ほか関係の大字と渡御の経路

金砂の大・小祭礼の代名詞でもある田楽は社伝その他によると大同元年（八〇六）に始まり、小祭礼が弘仁六年（八一五）、大祭礼が仁寿元年（八五二）に開始されたという。祭礼の目的は、天下泰平、五穀豊穰、万民法楽の祈願であるとされている。また、大・小祭礼が行われる年頃は、神の霊力が衰えて天変地異や不作が起るので、祭礼を行って清浄な水木浜の潮水で神体を清め、霊力を強大にするのだとも言われている。最近の大祭礼は平成十五年であった。現在、金砂山は西金砂神社と東金砂神社（常陸太田市天下野町）に分かれているが、古く「金砂山」と呼ばれていたのは西金砂山であり、寺社が現在のようになり西・東に分かれた時代は判然としない。史料の残る近世以降の大祭礼は、日程をずらして両社とも行っているが、現在も小祭礼を行っているのは西金砂のみである。

近世の西金砂山は、二代水戸藩主徳川光圀の命によって別当が真言宗の定源寺から修験の宝蔵院に替わったことにより、祭礼も修験色が強かったと考えられるが、明治以降は寺が廃され、西金砂神社として祭礼も神式に改められた。近代以降は小祭礼の日程も三日間から四日間へ、司祭者が田楽太夫から宮司へ、渡御の折赤地金欄の袋に入れ榊の枝に結いつけていた御神体は、神輿へ納めての出社へ、などと変化している。

なお、氏子四大字をはじめとする関係地区では、祭礼の記録は残してはならぬと言えられ、小祭礼関連の史料は極めて少ない。

〔実施内容〕

平成二十一年三月十九日から実施された第一九八回小祭礼の概要は、以下のとおりである。

- 一日目 午後一時出社―天下野―永久橋（天下野・中染境での渡御行列引渡し 通称七度半）―午後六時中染仮殿着 【中染泊】
- 二日目 午後二時中染仮殿で町田火消行列繰込み、祭典・田楽 【中染泊】
- 三日目 午前八時中染発―十時半和田祭場で町田火消行列繰込み、祭典・田

楽（和田七か村の余興）―芦間で祈禱―下大門で祈禱―増井―午後七時半馬場仮殿で祭典・田楽―（バス等使用）―中染仮殿着 【中染泊】

四日目 午前八時中染発―永久橋―天下野宿で町田火消行列繰込み―十二時半西金砂神社大町場着 御神馬行事・西四か村花纏繰込み・町田火消行列繰込み―神輿御飯屋へ渡御 祭典・田楽―神輿下飯屋へ渡御 祭典・田楽―潮水行事―本殿へ還御、入社

神社の祭礼として行われている行事の内容は以上のようなもので、詳細も多く報告されている。よって本書では、祭礼を実施している氏子、特に「宮本」と呼ばれる大字上宮の人々の働きを中心として、祭礼に特別な関わりを持つ家々に触れつつ準備段階から報告する。なお、町田の火消行列と西四か村の花纏は小祭礼のみの行事で、磯出大祭礼では行われない。

初会議

小祭礼は、西四か村と呼ばれる氏子四大字と、東三か村と呼ばれる天下野、中染、町田（いずれも常陸太田市）合わせて七大字の代表者が出席しての神社での合同会議で執行の有無が協議されることから始まる。六年前が大祭礼執行年に当たっていたため前回の小祭礼は平成九年であり、それまでは執行予定年の一月十五日が七か村の初会議と決まっていたが、今回は前年の五月下旬に内々で西四か村の氏子総代会議を開いて叩き台を作り、七月二十日の七か村合同会議をもって執行と日程が決定し祭礼の準備が始まった（写真1）。



写真1 西・東七か村合同の初会議

世話人

小祭礼の執行には、関係各地区で選出される世話人が大きな役割を果たす。氏子総代を出している西四か村では、各地区で世話人が選出されると、氏子総代は神社側の人間として働くこととなり、地区で担う祭礼費用の募金や花纏繰込みに必要な準備、笠揃え・笠ぬきなどの地域での行事の一切は世話人の仕事となる。しかし、宮本である上宮の世話人は、大字内の諸準備を切り盛りするにとどまらず、小祭礼の行列の渡御と大町場での行事を進行する上で重要な役割を担っている。

上宮には十一の小字があり、四つの区に分かれている。各区一名の大世話人と各字二名の世話人、合計二十六名が選出されるが、別に相談役として警固二名が大世話人経験者から選ばれる。警固は奇数区と偶数区から交代で出すことになっており、今回は二区と四区から選出された。また、警固を出す区の大世話人が主任と会計という主導的役割に就く傾向がある。

準備開始の早かった今回は、九月中に氏子地区の世話人が決まり、十二月に入ると各大字で会議が開かれ、奉賛金等の募金活動や、花纏や鳴り物など自分たちの地区に関わる準備を開始した。

上宮の世話人たちも大字内の準備を進める一方、宮本として関係地区を束ね、西金砂神社の手足となって働かねばならない。まず行うことは、氏子以外の関係地区への祭礼執行のあいさつで、四つに手分けして、東三か村、和田七か村（和田・東連地・松平・芦間・棚谷・国安・和久）、増井・下大門（一二・上大門（一二）、馬場真淵・馬場上・馬場下・新宿上・新宿下の区長や町会長宅を訪問し、決められた口上を述べる。これを掛合という。そのほか、上宮の古利菊蓮寺へのあいさつ、御神馬を奉納する上宮宇高橋の関宣夫家を訪問して奉納の了解を得ること、再度関係地区の区長・町会長宅を回り、警察署に提出する道路使用許可申請書への押印を依頼するなど上宮の世話人の仕事である。

二月末からは関係地区で小祭礼のための事務所開きが始まり、各事務所間を世話人が手分けして手土産を持ち訪問する。事務所を開いたら、祭礼終了まで

毎日交代で事務所に詰め、神社や他地区と連絡をとりつつ準備を進める。かつては事務所となる家が決まっていたが、現在は地区の公民館を利用している。

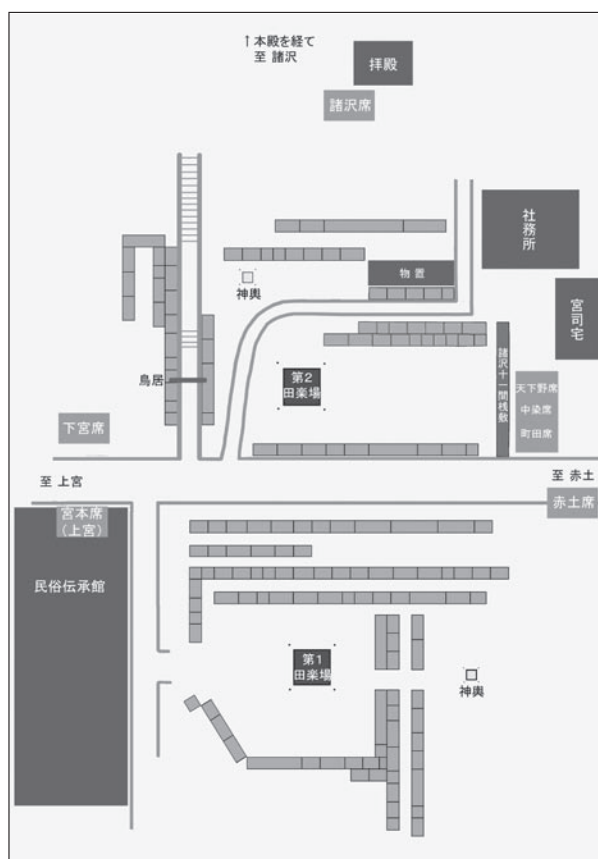
駕輿丁と警固

また上宮には、駕輿丁と警固という、大・小祭礼において世襲で特別な役割を果たす家がある。しかし、現在は勤めの関係などでその役割を全うすることは困難であり、家ごとの事情に任されている。

駕輿丁は神輿を守る役割を持つと理解されており、知り得た範囲では字包石に三軒、数珠木に五軒（内一軒転出）、大草に一軒あつて、渡御行列に家紋入の弓張り提灯と紋服（今回は礼服）で加わるようになっていく。うち包石の菊池家（屋号滝の上）は大祭礼時に兒子を出す家でもある。

世襲の神社付の警固は字蜂巢に二軒あり、警固の弓張提灯を手に紋服の正装で神輿と神官を先導する。そのうち一軒の会沢家の当主は、祭礼中常に宮司と御神体につき従うとともに、大町場の棧敷割も代々務めている。

金砂祭礼の棧敷割については、中染祭場の棧敷割を関四兵衛家が行ってきたことが史料から明らかであるが、現在は関家の関与はなく、慣例として現祭場の地主と西染四姓（石沢・深沢・中村・石川家）、東染五姓（河井・平山・菊池・吉沢・大越家）の席が確保されているほかは行われていない。ちなみに、西染四姓、東染五姓は、中染九騎を含む「染村十八騎」と言われた家々であるという。しかし、西金砂神社境内、通称大町場の棧敷割は、大鳥居を起点に「御奉行所」分を経て、御神馬を奉納する関家の棧敷から測り出し、小祭礼ごとに現在も厳格に行われている（図2）。代々受け継いだ自分の棧敷に親類縁者を招き、混雑を極める祭場で悠々と重箱を開け酒を振舞うのが棧敷所有者の誇りである。今回は三月十五日に棧敷渡しが行われ、間口一尺につき四百円の樽代を神社に納めて権利を継続していた。なお、世襲の警固の家は諸沢地区にも三十軒ほどあり、こちらは現在地区の花纏行列に参加することとなっている。



お砂取りの家

三月に入ると祭場の準備が各地で行われる。中染、馬場、西金砂神社境内二か所の計四か所に田楽の舞台がしつらえられ、各地に神輿を安置する台が土や砂を盛って作られる。中でも、馬場祭場の神輿の台は、水木浜の清浄な砂を盛って仕上げる事となっており、水木浜から砂を採取する役は馬場町内の樋田家（現当主幹氏）が代々行う事となっている。今回は二月五日に西金砂神社でお祓いを受け、八日に水木講中の案内により、烏帽子白丁姿でお砂取りをしたという。自宅で乾燥させ、丁寧に保管しておいた砂は、後日馬場祭場の実行委員会に引渡し役割は終了する。

その他、関連地区では地区ごとの慣習に沿った組織によって準備が進められるが、同時進行で範囲も広いので、一度や二度の祭礼の機会では調査も報告もとてもしきれるものではない。

図2 大町場祭場と棧敷割図

祭礼初日

三月十九日、各地準備が整い御出社の日を迎えた。渡御行列に加わる神輿供奉の人々が神社に集まり、午前十時に拝殿にて出社祭を執行。山越し用の小型の神輿に御神体を遷し、午後一時に神社を出発。行列には、西四か村の氏子総代、中染字堀^{ほり}で奉仕する渡御中の奏楽「下^さり派^は」の人々、田楽師、神輿を担ぐ奉仕青年団、神官、楽人らとともに、宮本である上宮の世話人の半数に、選出された警固二名のうち一名を加えた十四名も加わっている。

上宮では、世話人と警固を十四名ずつふたつに分けて上番^{じょうばん}・下番^{げばん}とし、上番は出社から三日目の和田祭場まで、下番は和田祭場から最終日の入社まで神輿に従う。各番の大世話人二名は、行列の渡御を差配する中心的な働きをするこ
ととなる。

今回の小祭礼の行列順序は、出社時に筆者が観察したところでは以下のとおりである。

宮本旗（二人）―飛脚（二人）―役人（二人）―大世話人（二人）―世話人（十二人）―猿田彦命（二人）―太鼓（二人）―天狗面（二人）―社名旗（二人）―田楽宰主（一人）―田楽師（八人）―五色吹流（一人）―高張（二人）―真榊（二人）―下り派（十八人）―天下泰平・万民法楽旗（二人）―区内安全・五穀豊穰旗（二人）―賽銭箱（二人）―氏子総代（八人）―御楯（二人）―駕輿丁（二人）―御神輿（二十人）―賽銭箱（二人）―氏子総代（九人）―五色吹流（一人）―高張（一人）―警固（二人）―宮司（一人）途中から騎馬）口取（一人）―社務所付（三人）―神職（七人）―楽人（三人）

※トラック・バス等は除いた

これら総勢百名を超す行列が、天下野の人々が祭礼前に整備した山道を天下野へと下り、中染へ向かう（写真2）。

出社式に先立ち、宮本の世話人は飛脚を伴つて天下野の事務所と中染の会所へ出社のあいさつとして掛合を行い、山中からも天下野事務所に飛脚と世話人を派遣して館坂到着を知らせる掛合を行う。これを受けて天下野の世話人と区



写真2 天下野へと山中を進む渡御行列



写真3 中染祭場で田楽宰主が撒いた種粉を拾う人々

長らは渡御行列を迎えに館坂へと向かい、あいさつの掛合の後、天下野の一行に先導されて祭場へ入る。このように、使者を介する通信手段しかなかった時代の名残と、円滑に祭礼を進行するための方策として、この祭礼では掛合と呼ばれる丁寧なあいさつや連絡あるいは指示が頻繁に行われる。この後、小型神輿から大型の神輿への御神体の入れ替えを行い、御祈禱と御神酒頂戴ののち、一行は天下野世話人らの先導で中染へと向かう。

天下野と中染の境の永久橋に差し掛かると、橋の手前で行列は停止し、それぞれ飛脚を伴った天下野と中染の世話人が、幾度も橋を行ったり来たりして、渡御行列を天下野から中染へと渡し祭場までの案内を依頼する丁渡しの問答が展開される。地元の人々によると、中染が祭礼での優位を誇るため、天下野の世話人にいちやもんをつけてやり込めるのだという。この問答が長引くほど見物人は喜び、小祭礼初日の見所ともなっている。この丁渡しが俗に「七度半」と呼ばれているものである。

しかし、中染在住の関守也氏によると、出社してからの渡御行列の動向が、刻々と神社側から掛合として中染横川の関四兵衛家にもたらされ、七度目の掛

合を受けると関家が支度を整えて渡御行列を迎えに出立したこと、そして、丁渡しを行う村境の位置が、天下野の祭礼事務所と中染の会所のちょうど中間地点、半ばであることから出たもので、本来は、小祭礼を主宰していた関四兵衛家への礼を尽した掛合を指す名称であるという。

無事丁渡しが済むと、今度は中染の世話人らが天下野の世話人達も加わった行列を先導して中染の祭場へと向かい、途中、町田の世話人達も合流して、「下り派」の調べとともに祭場に入る。神輿を仮殿へ安置すると、宮司の祝詞奏上があり中染泊まりとなる。神輿に従ってきた上宮の上番の大世話人は、神官、氏子総代とともに飛脚を伴って中染会所にあいさつの掛合の後、消防団詰所を訪ね神輿の警固を依頼する。現在、供奉者のほとんどは自宅に帰って翌朝再び出勤するが、宮司以下数名は、現在も中染の民家に分宿している。

一方、上宮に残った下番の世話人達は、鳴り物車両の飾り付けなどを行い、翌日の笠揃えに備える。

二日目

中染で祭典と田楽が行われる。

祭礼に関係する地域の人々には、中染こそが金砂神の渡御地であり、本来小祭礼を行っていたところ、と認識されている。古くは、田楽師の古川氏も中染に住していた(のち西染に移る)。東三か村の合同会議は、今でも中染が招集し、進行の中心となる。ご出社の前日に、中染では祭礼事務所とは別に会所が個人宅に開設されたが、「会所」という名称を用いるのは中染のみで、これも他地区とは別格であることを示していると理解されている。和田での田楽奉奏についても、毎回事前に神社と中染に伺いを立て、了承を得なければ叶わない。

金砂の大・小祭礼への関家の絶対的な関与は、四兵衛家が幕末の水戸藩内の争いに巻き込まれたことによって文久二年(一八六二)の大祭礼をもって終わり、中染での祭礼を取り仕切る権利は中染村民に移譲され、当時の中染村の全世帯七十三戸に大・小祭礼の世話人株が与えられたのだという。よって近年ま

で、中染の大・小祭礼の世話人は、株を持つ七十三戸から選出してきたが、今では世話人株の有無にかかわらず選出しているとのことである。ちなみに、近代以降、関四兵衛家は西・東両金砂神社の大祭礼に御神馬を奉納している。

午前十時に町田公民館を出発した町田の火消行列が、笠揃えとして町田の宿で繰込みを行ったのち、長年お火消の控所となってる関久雄家で昼食をとり、十二時半には中染の消防分署前に至り、行列の先駆となって中染の会所前あたりから演技を行いつつ中染祭場入口に至って止まる。中染の世話人たちが前後について、宮本世話人と氏子総代が祭場に入り、続いて町田火消行列の繰込みとなるが、午前中に降った雨のため祭場通路のぬかるみがひどく演技せずに通る、町田世話人、天下野世話人と入場した。すでに神輿は仮殿に安置されているため、「下り派」と神官らは繰込みの行列には加わらない。

奏楽の中、神官が祭場に入り、午後二時に祭典開始。太鼓を打ち鳴らして御神楽を上げた後、大祓の祝詞と榊による修祓、献饌、宮司による祝詞奉上、玉串奉奠、神官の総礼、御神楽、で祭典は終了する。中染祭場で宮司に続いて玉串を奉げたのは茨城県知事であった。引き続き名高い金砂田楽の奉奏となり、見物人はどよめく。近代以降、古川氏はこの地を離れ、田楽は地域に残った人々によって伝えられている。第一段四方固め、第二段獅子舞ののち、第三段種まきの中で、田楽宰主が枡に入れた種粉を舞台上から撒き、見物の人々は争ってこれを拾う（写真3）。その年に蒔く種粉に混ぜて植え付ければ豊作になると伝えられているからである。第四段の一本高足で田楽は終了し、中染での祭事は終了である。

上宮の上番の大世話人は、祭事の前後に各大字の世話人にあいさつやお礼の掛合を行い、終了後世話人会議を開いて翌日の打ち合わせを綿密に行う。この日も、中染泊である。

同日、上宮、下宮、赤土の地元では、笠揃えとして花纏行列を仕立てて各大字内を練り歩き、祭礼最終日の花纏の繰込みに備える。

和田七か村もそれぞれ手踊りの屋台を曳いて笠揃えを実施する。小祭礼とし

ての渡御や神事・田楽とは別に、関係地区がいわゆる付祭りとして各々独自の祭礼を行うのである。

三日目

四日間の行程中、祭事も多く最も移動距離の長い日である。

午前八時、中染世話人の先導で中染祭場を出発、町田との境で中染と町田の世話人の代表があいさつを交わし、町田地内を通る行列の先導を依頼する丁渡しを行う。中染の世話人はここで行列を見送り、中染へと帰る。町内で一度演技の後、火消行列も世話人に続き、行列を先導してゆく。町田と和久の境では、和久の世話人代表が待ち構えており、町田世話人との間で丁渡しを行う。町田世話人もここで行列を見送るが、火消行列は和田祭場まで供をする。

和久・国安境、国安・松平境でも同様の丁渡しを行ってゆき、和田境の手前、山田小学校前を過ぎた礼の宮と呼ばれる場所で鳴り物を止め、行列は一時小休止となる。それより前、蛸橋付近で宮本の大世話人が飛脚同道で行列を離れて和田の祭礼事務所を訪れ、行列が礼の宮に到着した旨の掛合を行う。町田からも飛脚を伴い世話人の代表が和田事務所に掛合を行う。これを受けて和田七か村の世話人が礼の宮まで迎えに行き、和田の大世話人が先頭となって行列を和田祭場へと導く。

和田七か村の屋台が祭場に入り所定の場所に納まると、町田火消行列は和田の世話人が指示する場所から演技を行って繰込み、祭典、田楽、そして余興の七台の屋台の手踊りと、和田祭場は最終日の大町場とともに小祭礼で最も賑わうところである。近世も付祭りが賑やかに行われていたことが『常陸国北郡里程間数之記』に記載されているが、田楽はそう古くない時代に地区からの熱い要望によって行われるようになったとみられる。

大・小祭礼の各祭場で、名前を読み上げられ御神酒頂戴にあずかるのは家の誇りであり、近世の大祭礼では御神酒頂戴の許諾書が下されていた。昭和初期まで和田で一番に御神酒を頂戴する家は、中染の関氏同様、中世からの家柄

を誇り、近世は和田村で庄屋を勤めていた和田氏の本家（現当主 一寿氏）であつたという。

行列に加わっていた上宮の世話人は、和田祭場で下番の世話人と交代し、上宮に戻って翌日の大町場での行事の準備に取り掛かる。火消行列の一行も繰込



写真4 潮汲み容器とする竹を探す



写真5 潮掛け桜に下げられた竹筒

みが終わると祭典等には関わらず町田へと戻る。

供奉行列の人々は、祭典と田楽が終了すると昼食をとり、午後二時半頃和田の世話人の案内で余興の続く和田祭場をあとに芦間へと向かう。各地区境で丁渡しを行いつつ、芦間、下大門（上大門の関係者も参加）それぞれで祈祷し、接待を受け、急ぎ馬場へと向かう。途中、習わしとして増井の正宗寺入口で宮司は下馬し、用意された酒をいただく。下大門・上大門の案内で新宿、新宿の案内で馬場へと引き継がれ、馬場の世話人らの先導で午後七時過ぎに馬場祭場に入って祭典と田楽を行い休憩となる。休憩のための小宿となる家が慣例で決まっており、馬場八幡隣の樋田家（屋号オカンヌシ）が西金砂神社神官の、東側の本多家が田楽宰主と田楽師の小宿である。しかし、近年神官は馬場八幡の社務所で休憩しており、本多家のみが小宿をつとめた。

この日も中染に泊まるため、バスやトラックを使つて神輿も人も中染に移動。到着は十時半頃となる。

諸沢地区の花纏行列の笠揃えはこの日に行われ、また、上宮から二名が、やはりこの日、日立市水木浜に潮水汲みに向う。潮水汲みは蜂巣在住の者が行うこととなっており、特定の家はない。

潮水汲みの担当となった二名は、朝七時半頃西金砂神社で烏帽子と白丁に着替え、送迎担当者の車で天下野坂本の会沢家に向う。会沢家は代々の水戸藩主が宿泊にも使った名家で、邸内には泉が湧き、西側の傾斜地は竹林である。現在、会沢家の人々はこの家に常住していないが、小祭礼の潮水汲みの日には、都合がつけば縁者が前日から来て半紙、水引、麻を用意して対応する。潮水汲みの二人は家人にあいさつしてすぐさま竹林に入り、海水を入れる竹筒に適した竹を探す（写真4）。

伝承では、小祭礼の年ごとに会沢家の竹林に二股の竹が生えるので、それを潮水汲みに使うと言われている（神社には二股竹製の筒が保存されている）が、二股竹を探すことはなく、太さや節の間隔が手頃な竹を見つけると、四十センチメートル前後の長さで二本切り揃え、上の節に海水を入れるための穴を開け

て紙で栓をし、撚った麻ひもで二本一緒に上下二か所を縛り、紙で巻いて水引を掛ける。準備ができるとお茶を馳走になり、神社への御供えとして酒をいただきます、水木講中の待つ水木浜へと潮水汲みに向かった。

その日のうちに神社へ戻り、清浄な潮水の入った竹筒を、拜殿への石段下の通称潮掛け桜に掛けておく（写真5）。かつては、二日目に徒歩や自転車を出発し、水木講の世話人宅に一泊して海水を汲み神社へ戻ったという。

四日目

出発の前に、飛脚を伴った宮本の世話人は、連日通り会所や消防団詰所などにお礼など種々の掛合を行う。渡御行列の人々は午前八時に中染祭場に集合し、迎えに来た中染世話人の先導で祭場をあとにする。消防署入口国道より町田の世話人と火消行列も加わって中染世話人の後に続く。永久橋で中染から天下野へ丁渡しが行われ、天下野の世話人代表が先頭で進む。宿通りで町田火消行列の繰込みが披露されるが、もともとは通過するのみであったものを、戦後、天下野宿の有力者らの要望により行われるようになったのだという。

天下野小学校で昼食をとり、大型の神輿から小型の神輿に御神体を遷す。引き続き天下野の世話人代表が先頭で宮本世話人、世話人代表を除いた天下野一行、中染一行、町田一行、氏子総代・神輿・神官らの渡御行列と続き、神社へと向かう。本来は火消行列も供するのであるが、現在はバスで神社に入っている。

一方、神社境内には午前九時頃から、西四か村の関係者たちが花纏とともに所定の席に入る。各大字の席は、上宮が伝承館入口、下宮が道を挟んだその向かい側、赤土が宮司宅に向き合う道を挟んだ駐車場、諸沢が拝殿前となっており、それぞれの地区に続く参道口に位置する。到着するとすぐさま飛脚を伴った世話人らが、宮本をはじめとする各席へと行き交い、互いに到着の掛合を行う（写真6）。

大町場での各種行事の前後には、必ず掛合を行なって滞りなく進めてゆくこ



写真6 諸沢席に到着の掛合をする下宮の世話人



写真7 大町場での西四か村の式 花纏の繰込み

とになっているが、近年は、社務所と宮本席への行列の進み具合の報告も電話で行い、共通の連絡事項に関しては、各氏子席への掛合も場内アナウンスで伝えるようになった。

十一時を過ぎると、祭礼見物の人々も続々と集まりはじめ、関家が奉納する御神馬も背に御幣を立て支度を整えて御神馬棧敷に入った。間もなく、纏立と纏開き、御神酒開きを促すアナウンスが入った。これは、西四か村がそれぞれ持参し、本殿に向けて寝かせるか傾かせるかしておいた花纏を立て形を整えて、各大字席で持参の酒を飲み、赤飯、煮しめを食して昼食をとれとの指示である。本殿に向けて花纏を寝かせておくのは、花纏に神霊を宿すためらしいが、今回は雨が降り出したせいもあり、寝せている地区はなかった。

行列は十二時半頃神社入口付近、山道出口にある鳥居の場所、通称逆川に到着すると一旦停止し、飛脚を伴った上宮の下番世話人が社務所と宮本席へ向向き到着の掛合をする。それを受けて、上番の大世話人が飛脚を伴って逆川まで迎えに行き、ここからは宮本が先導して赤土席の前に至る。東三か村の世話人らを所定のテントに案内し、無事到着のお礼を述べる。天下野と中染の一行は

これで役目が終了である。下番の世話人は宮本席に合流し、宮本からは氏子三大字に神輿到着を伝える。続いて西四か村の式と呼ばれる花纏の繰込みの開始が伝えられ、各大字は席付近で行列を整える。

花纏の繰込みは宮本の寄太鼓を合図に、上宮の花纏行列が赤土席へ、下宮の行列が諸沢席へと出発する。下宮の行列が石段に差し掛かる前に、御神馬行事として御神馬の石段の駆け上がりが行われ、祭場は大いに沸く。御神馬はそのまま境内と祭場を一周する。

花纏の行列は、他字の席前を通過する前後に、飛脚を立てた掛合を行い、上宮の後に赤土が、下宮の後に諸沢が続く形で、賑やかにお囃子を奏しながら決まった経路をたどって練り歩き（写真7）、拝殿と二か所の田楽場を回って各席へと戻る。宮本で鳴り物止めを伝え、四か村の式は終了する。

花纏行列は大字によって違いがあるが、諸沢を例にとると、飛脚、山後見人、大・小世話人、警固、区長、花纏、鳴り物、宿後見人、坪世話人、近所世話人ら五十名余りで構成されている。

式が終わると、宮本から氏子大字席にお礼の掛合があり、東三か村にも終了



写真8 鎮守の十二所神社に向う諸沢の笠ぬき行列



写真9 町田の競り払い（3月29日）

した旨の掛合をする。四か村でも代表が社務所に式終了の掛合をする。

その後、東三か村の式に移り、町田火消行列の繰込みとなる。三か村といっても、天下野と中染は加わらない。しかし、中染で地区民から徴収する小祭礼費用を「纏出し金」と呼んでいることから、かつては纏を出していた可能性が高い。

宮本世話人の先導で、町田火消行列と町田の一行が続き、それまで赤土席付近に置かれ、小型の神輿から御神体を遷した神輿が、氏子総代や神官たちとともに大町場へ入り、一段高い場所に設けられた第一田楽場の神輿安置所へと進む。田楽場への演技しながらの火消行列の繰込みが大町場での東三か村の式であり、これが済むと祭典と田楽が行われる。

町田の人々の神社での役割はこれで終わって下山し、その日のうちに笠ぬきとして、町田の宿通りで火消行列の演技を行う。地元の人々の手厚い慰労を受け、地区関係者をあげて祝宴を張る。

大町場では、第一田楽場に引き続き、大鳥居右手の第二田楽場に神輿を遷して再び祭典と田楽を行う。第二田楽場での行事以降は、神社の行事となっており、世話人は関わらない。この頃は、すでに日も暮れ、寒気も強く、見物人もまばらである。

田楽が終了すると、宮司が警畢^{けいひつ}の声をあげて神輿より神霊を取り出し、潮掛け桜の根元に設けられた幕舎に入る。この時、潮水の入った竹筒も持ち入れる。宮司一人が幕舎内で潮水行事と呼ばれる神事を行う。この間、神社付の上宮の警固一名が石段側に灯りの入った提灯を持って佇んでいる。潮水行事の間に、外の神官が警畢を三声あげた。

宮司が警畢をあげながら錦の布で覆われた御神体を持って幕舎より出ると、警固を先頭に、宮司を含む神官五名と下り派の奏者が小さな列をなし、太鼓と笛の音とともに静かに本殿へと石段を登って行き、つつがなく御入社となった。

笠ぬきと競り払い

花纏を出す西四か村と町田および屋台を出した和田七か村のように、地区で笠揃えを行った地区では、後の祭りとして笠ぬきを行っているようだ。

知り得た範囲では、町田では前述のように小祭礼最終日、諸沢が御入社の翌日である（写真8）。諸沢では、前回の小祭礼まで、笠ぬき終了後に祭礼のために購入した器物や酒などの競り払いを行っていた。祭り気分も続いており、思わぬ安値で目当ての物を手に入れたり、競りの過程を楽しんだりと賑やかであったが、今回は競りに掛ける物もないので取りやめとなった。町田では今回も日を改めて競り払いが実施された（写真9）。

上宮も御入社の翌日に笠ぬきを行うが、午前中に大町場祭場の片付けや伝承館の清掃を行って、午後実施している。あとは各地区とも祭礼経費の精算と報告をして、世話人たちの小祭礼は終了する。

〔類似の祭り・行事〕

磯出や浜降りを行う行事は千葉県から宮城県の太平洋側を中心に広く見られるが、県内では、北茨城市花園神社の潮出祭、日立市黒前神社くろみさきの潮垢離かみね神事、同じく神峰神社の潮垢離が知られている。これらは海に神幸するものであるが、湖沼や川に降りるものも数多い。

金砂大祭礼を含め、実際に磯出する祭礼は大掛かりであるため、花園神社も黒前神社も祭礼の執行が困難となっている。昭和四年を最後に中絶している旧那珂郡内の多数の神社が平磯に神幸するヤンサマチも同様である。その中で、花園神社で毎年五月五日に行われている例祭は、七日間精進潔斎した潮水汲みの使者が、徒歩で天妃山てんびざん海岸に至り、白土家当主の汲んだ潮水を竹筒に入れて徒歩で神社に戻り、この潮水をもって神輿の前を清めるというもので、祭礼に関与する地域は限られるものの、小祭礼との共通点が見出せる。

〔参考文献（資料）〕

『西金砂の祭礼と田楽』金砂郷村史編さん委員会 昭和六十年
『金砂山の磯出と田楽』日立市郷土博物館 平成十四年
『金砂大祭礼調査報告書』金砂田楽調査研究会 平成十四年
櫻村賢二『周期的祭祀に見る宗教的意味―西金砂神社小祭礼を中心に―』『日本民俗学』二三〇号 平成十四年

DVD『西金砂小祭礼―諸沢地区の対応―』常陸大宮市、『西金砂神社小祭礼「町田火消行列」物語』常陸太田市 平成二十一年（助成／財団法人地域創造）

（石井 聖子）